

第5章

太陽の大きいなる陽

体内に摂取されるエネルギーはすべて太陽からのもの

自然界のすべては神によつて企画された匠たくみである。なかでも「生きとし生けるもの、太陽エネルギーによつて生かされている」ということに、私たちは神秘的な想いで憧れ、認識してきた。この世に生まれたこと、そして老いること、病むこと、そして死ぬこと。生病死はこの大自然の摂理に出発し、この理法に帰結する。

太陽の光エネルギー、それは生命の基幹物質——生命素である。その大きいなる陽こそ、生命活動の源泉なのだ。その暖かな日射しは、心身を癒してくれることを、大古の昔より人々は本能として知つている。

ビタミンCの発見でノーベル賞に輝いたハンガリーのアルバート・セント・ジェルジ博士は言つた。「体内に摂取されるエネルギーはすべて太陽からのものである」と。太陽から地球上に降りしく光エネルギーは、地球世界で消費されている石油や石炭などの化石燃

料の約一万倍にのぼるといわれている。その太陽エネルギーをとらえている地球上唯一のものが、植物のみどりの色素——葉緑素である。

薄暗い森の中で生きるシダ類は、わずかな光でも感知できる特殊なたんぱく質（受容体）を持っている。茎を光の方向へ曲げたり、あるいは光合成を行う葉緑体を細胞内で移動させたりして、光をとらえる効率を高めている。植物は光をとらえるのに懸命なのである。

なぜなのか？ 光なくしては生きられないからである。こうしてとらえられた光は、光合成と呼ばれる一大化学変化を行っていることは広く知られている。光合成は植物の生命を創造し、育成維持している。動物（人）の場合も光合成が行われているが、植物に比べてほんのわずかである。これをもつと活発にすることで、生命力も強まる。

動物は植物を食べるか、植物を食べている動物（草食動物）を食べるか、何れかによつて太陽エネルギーを取り入れてその生命を維持している。人もそうである。たとえば私たちが牛肉を吃べるということは、牛が草を喰むことによつて取り込まれている太陽エネルギーを、その肉から取り入れているということであり、みどりの野菜を摂ればなおさらのことである。

肉食動物は必ず草食動物をとらえて食べているということからも、こうした自然の摂理を知ることができる。もし、肉食動物が同じ肉食動物を食べていたらみどりから遠ざかり、太陽エネルギーを取り入れることができない。それは生きてゆけないということである。動物は本能でこのことを知っている。人とて同じ理法のもとにあるのである。

食物の中に含まれている太陽エネルギーの潜在能力は、その食物が光からつくられる度合いが高ければ高いほど強力なものとなつていて。光エネルギーをたくさん含む食物はみどりの野菜や藻類である。

反対に、動物性の食品や、加工し過ぎたり放射線を照射した食品、ジャンク・フード、ファスト・フードと呼ばれる食品など、食物連鎖が幾重にも重なつていてる食品は、光エネルギーが減つているか、まったく無くなつていて。生きた食物と死んだ食物との違いは、その食物に光が宿つているか否かの違いであつて、何々の栄養素が多いとか少ないとかのことではないのである。

生命の基幹物質——生命素

生命素のことを言うには、光合成を語ることから出発しなければならない。植物における光合成については広く知られている。森下敬一先生著『葉緑素と生命』から引用させていただいた。

植物の根から吸い上げられた水は、太陽の光によつて酸素と水素に分けられる。酸素は大気中に放たれ、大気中からは二酸化炭素が取り入れられる。溜め置かれた水素は二酸化炭素を還元して炭水化物をつくり出す。こうして、きわめて単純な無機物から複雑な炭水化物——糖をつくり出している。この糖質をもとにして、澱粉、脂質、たんぱく質、酵素、ビタミンなどさまざまな植物体を構成する全成分がつくり出されている。

ひと口にこう言るのは容易たやすくいが、水の分解と二酸化炭素の還元を同時に進行させることは離れ技は、これを人工的に行おうとしたらちょっとやそつとのことでできることでは

ない。たいへん大仕掛けな設備と二千度以上の高温、高エネルギーが必要とされている。これは要するに、光という最も逃げやすい量子力学的なエネルギーが、葉緑素を媒介として貯蔵型のエネルギーに変えて貯えられているということである。それは燃えることによつてエネルギーを解放する有機物の形である。

このように、もとはといえば水素、二酸化炭素といった単純な無機物から、植物の複雑な生命体を創り出している太陽の光は、まさしく植物の生命素である。そして、それはとりもなおさず動物（人）にとつても生命素なのである。

このことは、太陽の光エネルギーをとらえている葉緑素の、自然界に占める位置とその分子の構造から明らかのことである。それは動物（人）にとつても、植物と同じく葉緑素が太陽エネルギーの媒介者であることと、その分子の構造が動植物共通のポルフィリン体と呼ばれるものであることである。

ポルフィリン体を構成するのが、宇宙から地上に降りしく四つの原子（酸素、水素、窒素、炭素）が環状に連なつたピロール環と呼ばれるものである。ピロール環が四つ結びついてポルフィリン体をつくっている。

原始のこの地球上にあって、海水中に降り注ぐ四つの原子から生じたポルフィリン体が

片や葉緑素（クロロフィル）となつて植物界へ、片や血色素（ヘモグロビン）となつて動物界へと拡がつていった生命創造のドラマは、まさに神秘的である。

こうした想いは、古く十七世紀の中頃よりこのかた、フランスの物理学者エドム・マリオットによつて手がつけられた葉緑素の研究を、今日まで引き継いできた多くの学者の脳裏から離れなかつた。ことに十九世紀初頭になつてリヒアルト・ウイルシュュテッターが、葉緑素と血色素が同じものであることを発見してノーベル賞を受けてからは、動物の生命素として利用できる葉緑素の研究に拍車がかかつたのである。

ちなみに、血液の赤い色素ヘモグロビンはヘムと呼ばれる色素と一種のたんぱく質グロビンとの複合体であるが、ヘムの分子構造もポルフィリン体であることから、研究者たちが思つた生命素とは、どこまでも血液の近似物質としての葉緑素であつた。

そうこうしているうちに、「序章」で触れたが、ドイツの細胞生物学者オットー・ワールブルクが、葉緑素中に生命の基幹物質が存在することを予見していたのである。以来幾星霜、それは生化学から生命科学、そして量子力学と、ミクロとマクロの次元からの「生命とは何か」の探究の中から得られたのである。

植物のみどりの中に化学的エネルギーに変えて蓄えられている太陽の光エネルギーを、

安定した形で取り出して元の量子力学的エネルギーに原子転換して利用するという発想は、たまたま太陽エネルギーを人体内で励起する物質が茶葉から得られたことで、現実のものとなつたのである。それはまさしく生命素と呼ぶにふさわしいものである。

仮にこれ以外に生命素があるとなると、「生きとし生けるもの、太陽エネルギーによつて生かされている」という大自然の摂理が変わらなければならない。永劫に変わることがないのが大自然の理法であるから、太陽の光以外に生命素と呼べるものは存在しないと言い切れるのである。

再び大自然の理法——陰陽について

序章で、大自然の理法である陰陽の片鱗に触れたが、生命素に依る全人的医療——全機的医療を述べるには、どうしても、さらに陰陽の具体的な働きについて言わなければならぬ。「全機」とは「正法眼藏」にある仏教の用語で、生は全機の現れ、死もまた全機の

現れ——つまり「生死一如」を言つたもの。ひとくちに言つて、全機とは大自然とひとつなりであるところの生命の働きのこと。

ついでに、関連があるので私のクリニックの名「養神」について言うと、「神」とは心身一如なるところの肉体のこと。養神とはそうした肉体、つまり生命体を養うという意で名付けたもの。全機といい、養神といい、医療はどこまでもその人の全体を目標とする全人的医療でなければならぬのである。

さて、物質や事象には量と質の両面がある。体の場合は、陰陽は生命の量的な消長の度合いを表す物指しであり、虚実（体が虚しているか充実しているか）は質的な不足か過密かの度合いを表す物指しである。

この物指しで測る（漢方の診察）と、虚勞は陰陽で言えば「陰多くして陽少なし」であり、虚実で言えば「虚」である。陰陽には透徹した自然観照の結果生み出された哲学的で深遠な意味があるが、早い話が、日陰と日向、寒冷と温暖、沈静と高陽、衰えと盛ん、マインスとプラス、などと思つていただければ分かりやすい。

ついでに薬の陰陽をいふと、すべて体から瀉す（有余を除く）働きのあるもの（瀉剤）

や、身体を冷やす働きのあるものは陰性である。たとえば下剤や解熱剤などがそうである。反対に、身体を補す（不足を補う）働きのあるもの（補剤）や、身体を温める働きのあるものは陽性である。たとえば栄養剤や強壮剤、生薬の人参や山薬（やまいも）などがそうである。

食物にももちろん陰陽がある。薬と同じくその人の陰陽・虚実に随つて摂るのがよい。大自然の產物である人間は、自然を破れば必ずしつ返しを受けることを覺悟しなければならない。環境においても医療においてもそうであるが、特に食においてそうなのである。「食は命なり」と言われる如く、生命に一番基本的に関わっているのは食なのである。……。

その生命維持の仕組み、太陽エネルギーの摂取という視点からは、食の重要さは薬はおろか、なにものにも代え難い。古くは食養家といわれる人たちが陰陽に基づく食の摂り方を説き、新しくは栄養学者がカロリー学説やビタミン学説に基づく食を唱えてきた。前者は風土に根ざした簡素な食であり、後者は現代の多様な普遍的な食である。

食物の陰陽も、色や形などそれぞれの視点から知ることができる。

色調＝緑、青、藍、紫、白いもの、陰性。

黄、橙、赤、黒いもの、陽性。

形状＝軟らかいもの、長いもの、細いもの、水っぽいもの、陰性。

硬いもの、短いもの、太いもの、乾いたもの、陽性。

生長＝天空を指して伸びてゆくものの、陰性。

地上を横に伸びてゆくもの、地中へ伸びてゆくもの、陽性。

産地＝暖地に育つもの、乾いた土地に育つもの、陰性。

寒地に育つもの、湿地に育つもの、陽性。

味覚＝酸味のもの、辛味のもの、陰性。

鹹味のもの、苦味のもの、陽性。

甘味は中性。

料理とは自然の理を料^{はが}ること、調理とは自然の理を調べるの意。自然の理とは陰陽の理である。食物は料理、調理によって陰陽を転換させることができる。陰陽の転換は物質の本質的次元の変化であって、まさに原子転換である。たとえば野菜を生食すれば陰の取り

入れとなるが、加熱料理したものを摂れば陽の摂取となる。

加熱のほかに古漬けにするとか、天日に干すことによつても、陰性の食物が陽性に変わる。たとえば梅の実は陰性である。そのまま食べれば陰性の働きである胃腸を冷やし、腹はら下さしを起こす。これに、天日に干す、塩を加える、重しを載せる（求心力）、漬け込む（時間）という四つの陽を加えたのが梅干しである。色調も陰の青から陽の褐色に変わる。すばらしい陽性食品に原子転換する。

食べものに陰陽があれば、病氣にも陰病と陽病がある。沈衰性の病状を呈するのが陰病、反対に発揚性の病状を呈するのが陽病である。治病に当たつては、陰病には補剤と陽性食、陽病には瀉剤と陰性食といった配慮がなされなければならない。もし、陰病の人には瀉剤を用い、生野菜や青汁、果物といった陰性食を多く与えたらどうなるか。ますます陰が大きくなつて病状は悪くなつてしまふ。日常の食や薬でこうした自然を破る過ちを犯していることが余りにも多い。

「陰多くして陽少なし」の体に陽を補うことで回生の働きが起きるのは、生命の消長の理法——陰陽の法則からすれば当然なのであるが、その当たり前のことだが、間接摂取の日常

の食ではなかなか実感として受け取れない。それが生命素による直接摂取となると、陰陽によつて左右されている己が生命力の消長を否応なく実感することができる。

人は生來の素質が異なるうえに、その時点での体の虚実によつて病氣の現れ方が違つてくる。また、病氣に対する耐える力にしても、旺盛なると薄弱なるとがある。こうした稟賦の素質と病氣の陰陽によつて、たとえ病名は同じでも対処の方法は違つてくる。違えなければならないのである。そうでないと逆治になつてしまふ。逆治とは補^ほ（補う）さなければならぬのに瀉^{じや}（取り除く）し、瀉さなければならぬのに補してしまふという、まるで正反対の過ちを犯すことである。この過ちを犯すと、病氣は良くなるどころか悪くなつてしまふ。

およそ、生來丈夫で充実タイプの人の病氣は陽に発する。病氣が発揚性であるということである。たとえば急性病の風邪を例にとると、頭痛、発熱、無汗ではじまるのが通例。肩こりや悪寒を伴うこともある。流行性感冒のときは身体痛（関節痛や筋肉痛）を伴うことでそれと知られる。脈は浮いて力強い。

この場合は発汗、利尿によつて病邪を瀉することによつて風邪は速やかに消退する。

反対に、生來弱く虚弱タイプの人の病は陰に発する。病が沈衰性であるということであ

る。風邪は頭痛、発熱ではじまるのは前者と同じでも、自然発汗があることが違う。脈は浮いていても弱い。沈んでいることもある。顔は寒々として悪寒がある。熱感が強く上気して赤いこともある。

この場合、熱感が強いときは陽の現象（陰中の陽）であるから、軽く瀉すとよいが、自然発汗や寒冷の現象があるとき瀉したら逆治となる。これで風邪をこじらせていることが多い。殊に高齢者の風邪は陰に発していることが多いから、慎重に陰陽・虚実を見極めて対処しなければならない。

以上のことは慢性病の場合も同じである。病が長引くときは陰陽にも虚実にも変転がある。はじめは陽に発した充実タイプの人の病も、体が虚すに従い病は陰を帯びてくるのも自然の理である。

体の陰陽・虚実は漢方の望診、問診だけでもおよその判別ができるが、中には陽の中にも陰を孕み、実の中にも虚を藏するということがあつて、判定に苦しむこともある。

こうした陰陽・虚実の度合いを知る物指しは、漢方独特の四診（望診、問診、脈診、腹診）であるが、問診（票）だけでも、およその物指しとなる。卑近な例をいえば、単なる体調不良では陰とも陽とも判じ難いが、体衰氣弱となると「陰多くして陽少なし」と知ら

れる。

陰病と知れたら、躊躇することなく不足の陽を補つたらよい。何病であれこうした単純な方法で、明快な答えが得られる。ただし、この答えを得るには太陽エネルギーの直接攝取でなければならない。それを可能にしたのが生命素である。生命の基幹物質——生命素の発見に依つて、全人的医療——全機的医療が、幼小児からご老人まで、容易いものとなつた。

生命素で太陽の太いなる陽を、自在に取り入れることができる。そのとき、私たちは心地よい温かさに充たされ、「生きとし生けるもの太陽エネルギーに依つて生かされている」という大自然の摂理を、観念としてではなく実感として受け取ることができる。虚労という生命力の落ち込みから、的確に回生することができるるのである。

陰病は陽病より圧倒的に多い。それに、たとえ陽に発した病でも、病勢が長引けば遂には陰に傾く。末期ともなれば正に亡陽である。また、治病に決め手がない慢性難症は大抵が陰病である。なお、病気とはいわなくとも、老化、老衰は「陰多くして陽少なし」の現象である。これらのすべてが、いわゆる虚労の病なのであるから、生命素の出番となる。

こうした虚労からの回生の波及効果ははかり知れない。これまで東西両医学で決め手がなかつた難症に、それが陰病でさえあれば、確とした対処ができるのである。

たとえば、ご高齢で体調が落ち込んでいたら、手首の脈を診るとよい。まず、指先に触れる脈が細く感じられるか？ 太く感じられるか？ 前者は陰脈。後者は陽脈。次に速いか遅いかだが、前者は一分間に八〇台、九〇台、それ以上のこともある。速いは陰脈。七〇台は平脈（普通の脈）で陽。甚しく遅いときは陰が極まつた極虚の現象である。

陽脈なら問題ないが、陰脈が重なつていたら要注意。不整脈が加わつていたらなお危うい。生命素の出番である。大きいなる陽の直接攝取によつてすぐに、あるいは間もなく、陽脈に転じて不整脈も消え、確かにのちもうけとなる。体調が良くなることは言うまでもない。

